
チーズタルトの大冒険

唯

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

チーズタルトの大冒険

【Nコード】

N5621B

【作者名】

唯

【あらすじ】

売れないタルト、チーズタルト。『レアチーズタルト』や『めっちゃおいしい！チーズタルト』などが近くにあるため、自分は売れないと思ってしまうているチーズタルト。ある日、賞味期限があと1日に迫っているため、チーズタルトとは自分を食べてもらうべく町に出た。足も無いためひたすら跳ね跳ね。チーズタルトなりの冒険をして、最後は一体どうなるのか……？

(前書き)

自分はチーズタルトが大好きです。

でもどのコンビニを見ても、チーズタルトが最後の1個とかになっ
ている事がないんです。

なので、売れないチーズタルトの気持ちになって書いてみました。

なりきれているかどうか分かりませんが、是非読んでやってくださ
い！

僕はチーズタルト。

最近はコンビニとかでもよく売れているらしい。

いやあ、それを聞いて、チーズタルトに生まれた事を誇りに思うよ！

父ちゃん、母ちゃん、僕もちゃんとして売られてみせるよ！！

でもね、何故か、どこのコンビニでも僕はいつつも棚の奥。

だから消費者の皆様は僕に目もくれない。

僕みたいな普通のチーズタルトは……もしかしたら売れないのかもしれない。だって『レアチーズタルト』とか『めっちゃおいしい！チーズタルト』とかの方が先に売れてっちゃうから。

あ、大変だ！ 僕の賞味期限、あと1日しかないじゃないか！！！！セブンオヤブンが棚の奥なんか置くから！！

これならミニスコップに行った方がいいのかもしれない。でもミニスコップって僕の知ってる町内には無いんだよなあ……。

あとコンビニはどこがあるだろう？

あ、サークルBがあるかも！！

いや、でももうコンビニには頼らない方がいいかもなあ。

よし。僕は決めた！ 僕は、誰かに食べてもらえるように、自分から町に進出するんだ！！急げ僕！ 賞味期限が切れる前に！！

チースタルトの僕は今、町内をブラついてる。

え、足が生えたのかった？ そんなバカな話があるか。コンビニのダンボールの上に乗っかってこれからどうしようっかなあーって考えてたら、急に動き出したんだ。ガラガラに乗っけられてコンビニのバイトが運んでる。

このダンボールが今からどこに行くのか分からないけど、僕は賞味期限が切れるのをただ待っただけなんて嫌だから、とにかく降りずに居る。

お？ トラックだ。……あ、きつとこのダンボール、このトラックの荷台に積まれるんだ。

ダメだよ！ そんな事したら僕、潰れちゃうじゃないか！

よーし。さつと降りよう！

うん。無事着地。さて、問題は今からどうするか、なんだよなあ。手も足もない僕が、どうやってこの町を歩けと言っのか。

もう頼れるダンボールは居ないし。

いや、とにかく歩いてっってみよう。……と言うか、這ってっってみよう。

僕はとびうおのように跳ね跳ねして進んでいった。通る人達が見てくるかなあと思ってたけど、チースタルトのパッケージに包まれたままの僕は、風に吹かれて飛んでいるとしか見えなかったみたいだ。

少しつまんない。

あー。段々疲れてきたな。ベツチンベツチン当たるもんだからお腹も痛くなってきてる。どうしよう。少し休み………あれ？

うわ、うわうわうわ！ 雨だ！！

雨宿りだ、雨宿り！！

……お、丁度いい！ バス停があるじゃないか。頑張れ僕。あそこまで跳ね跳ねして行くんだ！

バス停に着くと、そこにはバスが来ていて、お婆ちゃんが乗ろうとしていた。

でも足腰が弱くなってるみたいで、杖付いてもプルプル震えちゃってる。助けてあげたいけど、僕はチーズタルト。

何も出来ない。

や、でも、何も出来ないと決めつけてるだけで、本当は何か出来るかもしれない。

やってみよう！

僕はお婆ちゃん足の足が乗っかってるタラップに飛び乗った。ただどお婆ちゃん、僕に気が付かない。

あ、え、うそ！？ お婆ちゃん、僕チーズタルトだよ！ ココに居るよ！！ 待って待って、足下ろすの待って！！

ぐえっ！

いいさ。どうせ僕はチーズタルト。僕の言葉なんて人間に届くはずがないんだ。

僕は見事に潰れた。タルトの部分はボリボリになって、チーズの部分もぐちゃぐちゃになっちゃった。

そしてお婆ちゃんの役に立てたか、って言うと、結局なんの役にも立てなかった。

僕が潰れただけ。

あーあ。やっぱり僕は無力なチーズタルトなんだな。

バスは僕を乗っけたまま走り出した。

振動が気持ちいいかもしれない。あ、でも早いとココロを退かないとまた他の人に踏まれちゃう。

僕は急いで運転席の傍に来た。ココに居れば、運転手に体当たりする人も居ないし、僕を踏み潰す人だつて居ない。

1つ目のバス停に着いた。ビーツと音が鳴ってドアが開く。1人、降りた。

2つ目のバス停に着いた。ビーツと音が鳴ってドアが開く。2人、降りた。

3つ目のバス停に着いた。ビーツと音が鳴ってドアが開く。1人、降りた。1人、乗った。

4つ目のバス停に着いた。ビーツと音が鳴ってドアが開く。1人、降りた。

5つ目のバス停に着いた。もうビーツとは音が鳴らなかつた。バスの中に乗客は1人も居なくなつてた。

居るのは運転手と僕だけ。

客が居なくなると、運転手は急にタバコを取り出した。

「ふうー。毎日疲れるぜ」

さつきまでの笑顔は消え失せて、タバコの煙に包まれた悪魔みたいな顔だけがあつた。

あれが『営業用スマイル』なんだろうな。……人間ってコワイ。

「お？」

あ、しまった。僕に気が付いたみたい。

「なんだコレ？ ……チーzustルト？ げ。潰れてやがる」

運転手は「ヘッ」って笑うと僕を投げ捨てた。

「チーzustルトの居るスペースなんて無えんだよ！」

つて言つて、バスは行つてしまつた。投げられた僕は地面に叩き付けられて、またベツチャンベツチャンになつちやつた。

もうこんなチーzustルト食べてくれる人、居ないだろうな。

僕は何の為に町に出てきてしまつたんだろう。セブンオヤブんに居た方が楽できたのに。

はあ。もう意味が無いや。

「ママー！ セブンオヤブン行こー！ 僕チーzustルトが食べたい」

「もう。しょうがないわね。今日だけよ」

「やった〜」

前から親子が歩いてきた。何、チーズタルトを食べたい？ 僕を食べたいのか！？

僕はココに居るよ！ ねえねえ食べてよ！

「わあっ！ チーズタルト！！ でも潰れてる！ 気持ち悪いよう、ママア！」

「あらホント。こんなの食べちゃダメよ。ちゃんと買って食べましょうね」

「うん」

…………… やっぱり…………… 潰れたチーズタルトなんて、しかも地面に転がってるチーズタルトなんて、誰も食べたがらないんだ。

大丈夫、分かってたさ。

うん、大丈夫。僕はこんな事でくじけたりしないぞ。きっといつか、僕を美味しい、美味しいって食べてくれる運命の人が見つかるはず。

子供に見捨てられたからってなんだ。しっかりしろよ、僕！

…………… と言っても。今、ココはどこなんだろう？ 全然分からないよ。バス停の文字を見てもなんて書いてあるのか全く分からない。

どうしよう……………。あ、なんか空が暗くなってきてる。もう夜かな。疲れたし、今日はこのバス停で休もうかな……………。

いやいや！ ダメだ！！ 僕は賞味期限前に誰かに食べてもらわないと！！ 疲れたって休んじやダメだ。頑張るんだ、僕！！

僕はまたひたすら跳ね跳ねした。もう雨は止んだ。きっと夕立ってやつだ。

僕が跳ね跳ねしてきた道は、外灯しかなかった。民家なんて全く無くて、僕の居たコンビニのある町とは全然違ってた。

でもずっと跳ね跳ねしていると、一軒の家が見えてきた。明かりがついてて、なんだか暖かい感じがする。

僕の体は、意識せずともその家に向かっていった。

でもその家からは楽しそうな声は聞こえてこなかった。ジツと見てたら、急にドアが開いた。中から女の人が出てきた。

「何よ！ アンタなんか一生チーズタルト食べてれば！ もう知らないから！」

そしたら中から男の人の声が聞こえてきた。

「お前なんかチーズタルト以下だ！ 俺のチーズタルトをバカにしやがって！ こっちこそもう知るか！！」

なんかチーズタルトを巡った争いみたいだった。チーズタルトがどうのこうのって。今僕は、チーズタルトの僕はココに居るんだよねえ男の人。もしよかったら僕を食べてくれない？ こんなグチャグチャのへニヨへニヨになっちゃったけどさ、賞味期限はまだ大丈夫だよ。

「……あれ、チーズタルトだ……」

男の人は、出てきて僕を見てそう言った。でもグチャグチャに潰れてるのを見て苦笑いした。

「これは……ちょっと食えないかな……」

やっぱりそうだよ。誰が踏んだか分からないチーズタルトなんて、食べてくれる人は居ないんだよ。子供にも男の人にも捨てられた僕。

どうすればいいんだろう。こんな踏まれちゃってちゃコンビニでも売ってくれるはずないし。

「でも……」

男の人は僕を拾い上げてくれた。

「こんなに潰れちゃって……誰が捨てたんだ。可哀相に」

かわいそう、って思ってくれるの？ こんな僕を？ こんなグチャグチャの汚い僕を??

「いや、大丈夫。食える食える！ 袋ん中入ってたから中身は大丈夫だよ」

……ホントに？ ホントに食べてくれるの!? 僕、踏まれても投げられても、跳ね跳ねしてきてよかった！

さあ、食べて。僕を食べて。

「賞味期限は、っと……」

大丈夫だよ！ 賞味期限ならあと半日は……。

「げ。もうとっくに過ぎてるじゃん」

……え？ でもだって、賞味期限は明日の昼頃まで……。

「2006年って……」

2006年？ 今は2007年で…… って事は2006年の2月???

なんでそんな物をコンビニに置いておくの？

だから僕は売れていかなかったの？

あ、カビだ。カビが生えてきてる。嫌だよ。気持ち悪いよう……。

「カビが生えてちゃもうダメだな。やっぱ食べねえや」

男の人は僕を捨ててそそくさと中に戻っていった。

どうして？ どうして賞味期限が切れるのに棚に置いてたの？

僕に惨めな思いをさせる為？ 自分の売れなさを更に自覚させ

る為？ 僕は食べられないままカビにやられていくの？

じゃあどうして、食べられないのに僕を作ったの？ どうして？

……どうして？

嫌だよ。このまま死んじゃうの？ 僕は幸せな思いしないまま死んでしまうの？

助けて。

誰か 助けて。

僕の意識は無くなった。最初からあったのか無かったのか分からないけど、とにかく真っ暗になった。
人に食べられて幸せな思いをしないまま、僕の意識はどこかへ行ってしまった。

「お、チーズタルトだ」

誰かが言った。僕を手を取った。
そして歩く。レジの音みたいなのが聞こえてきた。

……ん???

レジ?
どうしてレジなんてあるんだ?
だって僕はコンビニを抜けて町に進出して……それで……それで……

「ありがとうございました」

その男の人は自動ドアを抜けて歩く。そして走った。男の人はひた走る。

その人の家に着いた。ドアを開けて中に入って、机の傍にある椅子に腰掛けた。

セブンオヤブンの袋から僕を出して、更にチーズタルトの袋からも僕を出す。

そうか。僕が見てたのは全部夢だったんだ。

食べて欲しいという願望から来る、ただの夢だったんだ。

って事は、僕はまだ賞味期限切れてないし食べてももらえるんだ。

よかった。なんだ……………よかった。

「へへっ。いったただっきまーす」

うん。いただいて！

ああ。幸せだなあ。やつぱり最後はこうじゃなくっちゃ。

僕、やっと食べてもらえたんだ。

なんか段々ワケ分かんなくなってきた。自分の体がバリバリ言うてる。

でも痛くない。全然痛くないよ。

普通のチーズタルトでも、食べてもらえてよかった！！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5621b/>

チースタルトの大冒険

2008年11月7日08時21分発行